第 20 回

新たな命を吹き込もう

平成 27（2015）年 3 月

もう、春になったというのに、昨冬１１月２９日の夢アイデア交流会の審査エッセイを４カ月後に書くハメになった。渡辺明先生（初代・審査委員長）のピリリと辛い、好エッセイ連載が続いていたから、その面白さもあって、執筆は、忘却の彼方に行ってしまっていた。「３日前の古新聞」というように新聞記者には昨日の事件もたちまちセピア色の記憶となってしまう。ところがコラム担当者から催促のメールが続いた。

確かに「古く」なると、忘れ去るのが人間の性。古い背広は脱ぎ捨てられる。都市もそうだ。都市は常に生まれ変わる。夏目漱石がつぶやいたように「東京はいつも工事をやっている」。福岡市など那珂川沿いの赤煉瓦館や迎賓館を除いて、古いビルは次々と建て替えられる。最近の巷の話題は、福岡市・明治通りのビル群の建て替えで、それが進むように新ビルの規制緩和が論議されている。都市は、常に進化し、更新される。それはそれでよい。

今回の夢アイデアの応募作を読ませていただいて、貫く思想は「もったいない」あるいは「活用」だな、と思った。最優秀賞の「"復活！九大跡地で農業を"プロジェクト」優秀賞の「燻製が廃材を資源に変える」をはじめ、佳作の「水城歴史公園」「ホイールアートと花いっぱい」も、捨てられていく、あるいは消えて行くものの良さを残して、新しい生命を吹き込めないかという「気づき」と「思い」が込められていた。

審査しながら、しきりに思い出されたのが、ニューヨークで暮らす孫娘にねだられて訪れた「ハイライン・パーク」。マンハッタンのあの高層ビル群の中に長さ約２・３ｋｍの鉄道高架線や駅舎が廃屋となっていた。３５年前まで主に精肉など食材を中心市街に運び込む貨物線だった。廃線となって、赤さびたまま放置されていた。当然、撤去を迫られたが、取り壊す資金がなく、それも出来ない。高さ９ｍもあるから、「倒壊したら、誰が責任を取るんだ」とＮＹ市に善処を求める声が高くなり、撤去に動き始めていた。

そんな圧倒的な撤去の声の中で、「ＮＹの街の記憶ではないか」と惜しむ声、「何とか残せないか」と色々な夢・アイデアが出された。「そうだ。散策できる公園がいい」「セントラルパークとは一味違う公園が出来るぞ」―。有名俳優からヒラリー・クリントンまでが「それはグッドアイデア」と賛同、ＮＰＯとＮＹ市当局が同じ方向で動き始めた。

今、「ハイライン・パーク」と名付けられ、鉄柱で組み上げられた高架軌道がそのまま花いっぱいの散策道に衣替えして、大人気の公園に変身している。ぶらぶら歩くとビルの間からハドソン川が見え、そこからの風が心地よ

い。駅舎は気軽なレストランとして再利用され、誰もかれもがハンバーグをほうばって、何ともカジュアルな雰囲気だ。あまりに人の多さに、係員に「倒れる心配はないの」と聞くと、「大丈夫、リベットだし、錆防止に気を付ければね。勿論補強はしているよ」とウインクしてみせた。

取り壊して、新しいものを建てるのも、勿論、素敵だろう。しかし、捨てるだけ、壊すだけでなく、今回の夢アイデア応募作が一つでもいいから生かされ、新たな命を吹き込まれ，再登場できたら、こんな素晴らしいことはない。（完）

玉川　孝道（西日本新聞元副社長）
夢アイデア審査委員長（平成 22 年～令和 2 年)